

- 課題名 「サイエンス・メディエーター制度の推進」
- 代表者名 「高橋克忠」
- 中核機関名 「財団法人関西文化学術研究都市推進機構」

概要（サイエンス・メディエーター制度の推進）

調査研究の目標・概要

1．目的

科学技術の急速な展開にともない、専門家と非専門家との間の距離がますます広がりをみせている。本調査研究は、双方向の理解推進という施策をさらに進展させるために、専門的知識に接する機会の少ない児童生徒を含む一般市民と研究者・技術者との間に信頼関係を築き、緊密な連携のもとに科学技術の成果がスムーズに生活者に還元される社会的仕組みとしてのサイエンス・メディエーター（科学技術の媒介者）制度はどうあるべきかを調査研究するものである。

2．内容

各種の研究機関や自治体における施策の現状と課題を抽出するとともに、一線の研究者・技術者と児童生徒を含む一般市民との間の意識のずれを分析して、先進諸国における実態調査の結果と比較検討しながら、科学技術施策として、「学校教育」とは補完的な関係にある児童生徒や社会人を対象にした「社会が担う教育」はいかにあるべきかをとりまとめ、それをモデル的に実施する。

3．俯瞰的・融合的視点

どのようにすれば専門家と非専門家が正しい科学技術情報を共有し、どのような仕組みを構築すればスムーズに科学技術の成果を生活者に還元できるか、専門家の視点とともに非専門家の意識を重視し、心理分析の手法も取り入れてコミュニケーションのあり方を考える。

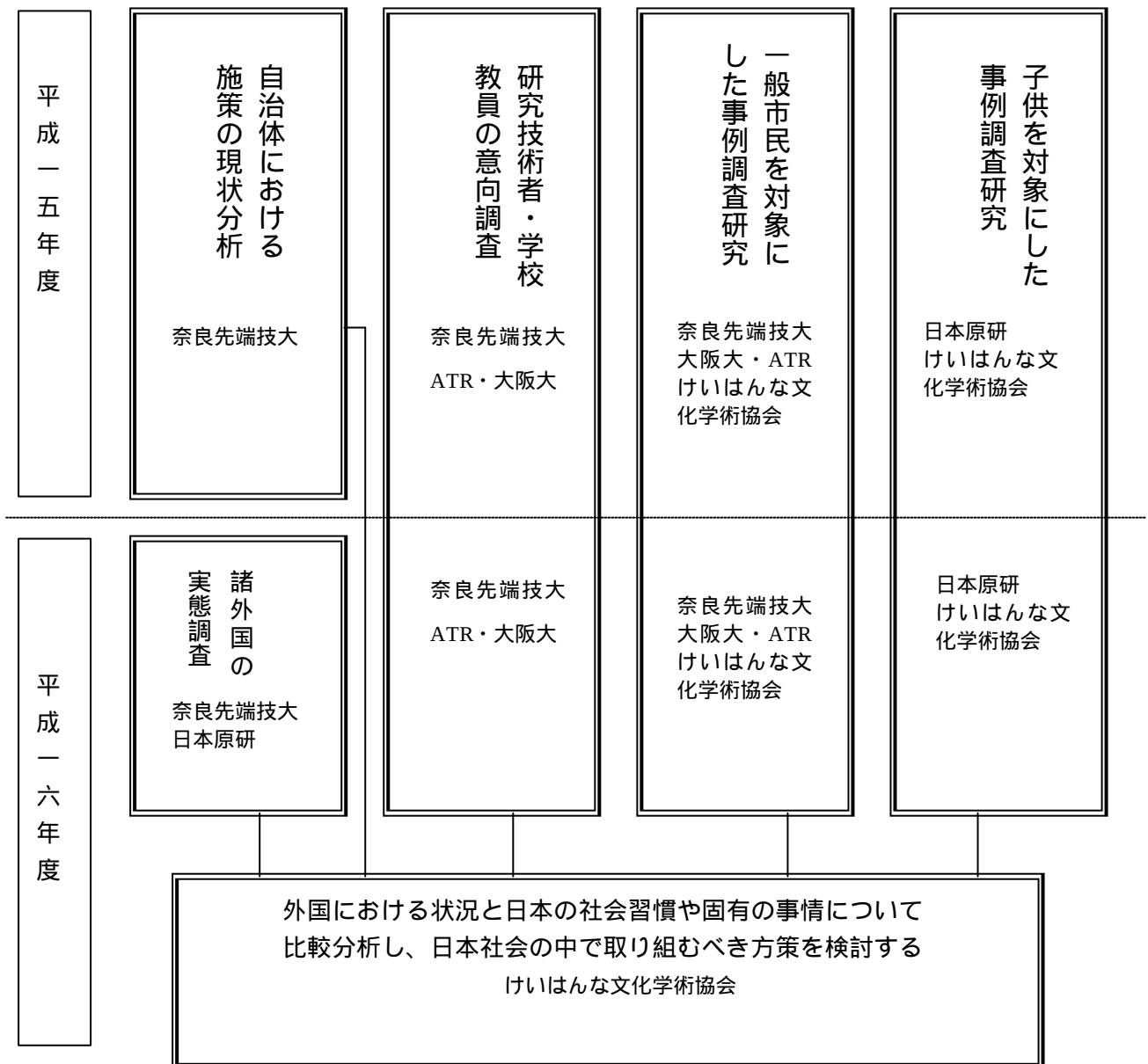
4．一般からの意見の反映方法

市民としては関西学研都市周辺の市民で構成される「けいはんな友の会」の会員（約5,000人）、専門家と非専門家を結ぶ場である「けいはんなサロン交流会」の参加登録者（約400人）、「予防医学講座」への参加者（1回の講座およそ120人）、児童生徒としては日本原子力研究所 関西研究所が実施しているプログラム（参加者1クール12日360名）（木津地区のスーパー・サイエンス・セミナー、「きっず光科学館ふぉとん」のサマー・スクール、播磨地区（通称：SPring8）のサイエンス・アドベンチャー・スクール）など、各参画機関が独自に実施している数多くの行事への参加者を調査対象として直接に意見を求める。

調査研究により期待される提言

- （1）長期的な観点から各種の科学技術施策が国民的理解のもとにスムーズに実施できる社会環境を整えるためにサイエンス・メディエーター制度が必要であることを提言する。
- （2）サイエンス・メディエーターに求められる資質・要件、役割として期待される像は何かを児童生徒を含む一般市民の意識調査をもとに分析評価し、これを提言する。
- （3）本制度をどのような方法で実現するか、自治体・企業・研究機関・教育機関・地域コミュニティの中でのあるべき姿をケーススタディーとして実施し、具体像として提言する。

実施体制（サイエンス・メディエーター制度の推進）

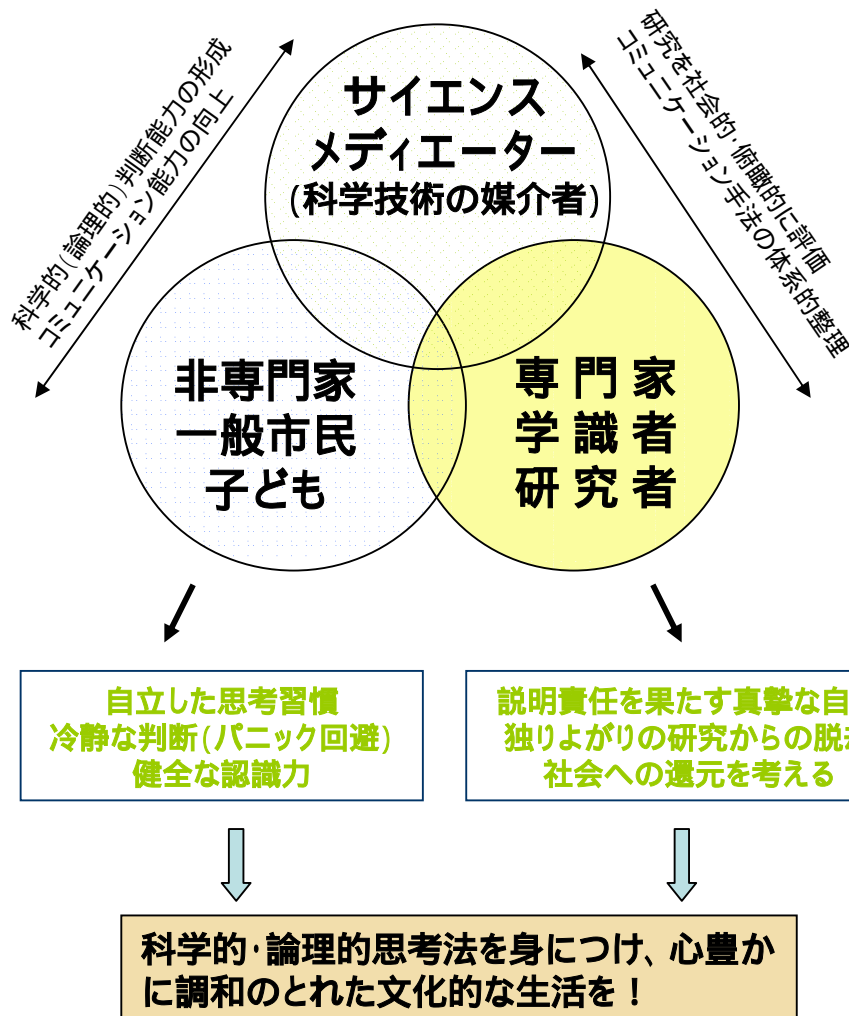


期待される提言

- （１）長期的な観点から各種の科学技術施策が国民的理解のもとにスムーズに実施できる社会環境を整えるためにサイエンス・メディエーター制度が必要であることを提言する。
- （２）サイエンス・メディエーターに求められる資質・要件、役割として期待される像は何かを児童生徒を含む一般市民の意識調査をもとに分析評価し、これを提言する。
- （３）本制度をどのような方法で実現するか、自治体・企業・研究機関・教育機関・地域コミュニティの中でのあるべき姿をケーススタディーとして実施し、具体像として提言する。

図中 「ATR」は国際電気通信基礎技術研究所を表す

専門家と非専門家が科学文化を広く共有していくためにサイエンス・メディエーター制度を確立・推進することが急務である



具体的な実践として

手法

- ・様々なタイプの講演を実施し、効果の比較分析を行う。
- ・定量評価のための有効な指標(発言連鎖数、感想等の論理整合性等)を明確にする。
- ・これらの過程で集められた知見を集積化し、科学的に分析、実証していく。

分析内容

科学的思考を培う講演手法の分析
レクチャー型/ディスカッション型

環境による積極性誘導効果の分析
明度、BGM、人数等の影響

話者と聞き手の認識のずれの分析

講演後の受け手側の科学的理解力・思考力の分析